ようこそ、宵闇町五番街へ。

志紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ようこそ、宵闇町五番街へ。

【Ｎコード】
Ｎ４１８５Ｙ

【作者名】
志紅

【あらすじ】
無法地帯（まぼろし）幻影町。その最奥人外すら暮らす危険区域“宵闇区”万事解決をモットーに掲げる解決屋。ある日事務所を訪れた少年の依頼から、物語は動き出す…。

序章　サービス（前書き）

完全なる志紅の趣味です。名前が変なのばっかりです。

あと区分がわからなかったのでファンタジーにしましたが、違うかもしれません。

その辺をご容赦下さいm（＿＿）m

序章　サービス

この度は解決屋　酒月（サカヅキ）をご利用いただき誠にありがとうございます。当社は皆様がお困りになっている事件・悩みその他何でも、解決が導き出せる事柄でしたらどんなことでも承ります。

公表に気が乗らないこと、どこでも解決が難しいと判断されてしまったこと、そんな悩みには是非当社をご用命ください。たとえそれがどんなに困難な案件でも、必ずや皆様に御納得いただける結果を残す…それが当社のモットーです。

さぁ本日も、皆様に御納得いただける解決をもたらしてご覧に入れましょう…。

＊

からん、とドアのベルが鳴った。

その音に猫谷三日月（ネコヤ　ミカヅキ）はまさに猫よろしく耳をピクリと動かすと、怠そうな声で黄昏、と言ってまたソファに沈む。

呼んだというよりはただ呟かれたその声に、同じく面倒そうな顔で…けれどきちんと答えて奥から青年が出て来た。そのままドアに向かった青年を、三日月はやはり怠そうに見守る。

しばらくして、ギィ、という音と共にドアが開いた。

青年…霧生黄昏（キリユウ タソガレ）の後に着いてきた少し怯えた様子の女性の姿に、三日月はニッコリ笑って立ち上がる。思い切り勢いをつけて立ち上がった三日月に女性はびくりと体を震わせた。

「…あ、の、…！」

「――ＯＫＯＫ、事情はそっちのソファで聞きますよ？…とりあえず、」

未だ不安げな女性に、満面の笑みと共にスッと手を差し出す。…好みではないかなと心の中でだけ呟いて。

「――…ようこそ、宵闇町五番街“解決屋　酒月”へ！」

――今回もまた、楽しめそうな予感がした。

一章　人生は思い通り

「さて、とお…。今回はどのような御用向きで？」

おねーさん、とにっこり笑って首を傾げると…27、8位かな、ギリおねーさんな感じの女性が頬を赤らめて口を開いた。ま、俺ってばイケメソですからねぇ。フフン。

「…リリィを…私のペットを、探して頂きたくて…！」

縋るような必死の視線に、いやいやじゃあ俺に見とれてる場合じゃないでそーと心の中で突っ込みつつ人差し指を唇にあてる。ふむ、と黙り込んだ俺に代わって今度は黄昏が女性に話しかけた。

「失礼ですが、“国”側の方ですよね？」

「え、えぇ…。」

「なるほど、ペットの目撃情報があった…とか？」

でなければこんな危険な場所に来ないだろうと言いたげなニュアンス。対して女性は歯切れが悪い。

「はい、…いえ、というより…」

口を噤み俯いた女性に黄昏は不思議そうだ。こらこら、きちんと意図を汲み取らなきゃダメじゃん。苦笑してとりあえず俺は言った。

「…もしかして、“怪猫”のペットですかぁ？」

「…―！どうして、」

弾かれたように顔を上げ、驚く女性に笑ってみせる。推測するのはそう難しいことでもない。

「ペットの現在地とか、普通はだいたいでもそんなに目星は付かないもんですけどぉ…あなたはわざわざここに来た以上、少なくとも“幻影町(まぼろし)”にいると分かってる訳ですよねぇ。じゃあそれはなんで、…って逆算して考えれば、おのずとねぇ？」

それでもまだ訝しげな表情の女性に俺は更に言葉を重ねた。こんなに頭働かせたのいつぶりでしょう。ていうか、なんで俺こんな言い訳みたいなこと言ってんだろ？

「最近はあんまり、特に“お国”じゃあ怪猫なんて見かけませんし聞きませんよねぇ。つまり、お国で見つかってしまったら恐らく大騒ぎになる。でもそれがないってことは…、無法地帯の幻影町かもしれない、ってとこですかぁ？」

「……はい。」

俯く女性に黄昏が呆れたようなため息を吐く。

「知らなかったならまだしも…、それなら国が使ってる首輪でも調達しておけば良かったのでは？」

口さがないねぇ。まぁ大いに賛成だけど。とニヤニヤ笑っていると、肩を震わせた女性が悲痛な声を上げた。

「首輪なら、してました！でも…いつもなら周期のとき側に付きっきりでいるんですけど、今回はどうしても外せない仕事があって…！それに、いつもよりずっと状態も良かった。なのに、家に帰ったら引きちぎられた首輪が落ちていて…。」

両手で顔を覆った女性にさすがに居たたまれなくなったのか、黄昏

は若干居心地悪そうに顔を逸らす。じゃあ最初から言うんじゃないよバカちんめ。

「あの子に、…リリィに何かあったら、私っ…！」

「――落ち着いてください。」

どうやらまた興奮し出した女性の横に回って背中を軽く撫でる。頼りない背中は一瞬ひくりとふるえた後、少しずつ痙攣が引いていった。震えが完全に収まったのを確かめてから、俺はあえてのんきな間延びした声で女性に話しかける。…うんそこKYとか言わないー。

「…原田さん、大体の事情は分かりましたぁ。とにかくこの依頼――…“酒月”はお受けしまぁす。」

「本当ですか！」

ガタンと音を立てて椅子から立ち上がった女性は良かった、と吐息を零した。お国の危険動物に指定されている怪猫の捜索依頼だ、他の探偵事務所なんかには頼めなかっただろうし、緊張するのも当然かもしれない。

ホントですよぉ、と女性を安心させるように微笑み、けれど直ぐに顔を引き締める。

「まずは、…黄昏、」

「分かってる。」

即座に反応した黄昏は片手に持っていた地図――って呼べるほど立派なもんじゃないけど…――をテーブルの上に広げた。さっすが俺の弟子だけあるよねぇ？

「これは…、」

「――幻影町の全体の地図ですよぉ。」

地図に目線を落とした女性に頷いてから、俺は地図の三区分されたうちの一つを指差した。

「ここが宵闇地区。三地区の配置なんかは…だいじょぶですよねぇ？」

ちらりと目を向けると、女性は小さく首を動かす。もちろん縦にね。そうだろうとは思ってたけど、ここに入るのにきちんと下調べして来たんだろう。

「じゃあ話が早い。…恐らく色々考えるとぉ、一番リリィちゃんが居そうなのはぁ…、」

ここですかねぇ、と俺が指差した場所を上から二つの顔が覗き込んだ。

＊

「―…んー、あれかなぁ？」

現在地、宵闇地区二番街商業エリア。

依頼人の原田さんから貰ったリリィの写真片手に、俺は首を傾げていた。

「グレーに黒の斑、青の瞳…―まず間違いないと思うけど…。」

うぅん、とさっきより更に首を傾けて猫と見つめ合う俺の姿は、ま

ぁかなり珍妙なことだろう。それでも注目なんてされないのがこの町なんだけれど。…ていうか、こんなに近くで見ても逃げないとか、それだけでもこの猫が普通じゃないことの証明にはなる気がするけどねぇ。

「むぅ…読みは合ってたけど、こんなに人…いや猫相が変わるとは。」

ペットとして飼われてた動物にそうそう狩りが出きるとは思えない。だから宵闇唯一の商業エリアであり、露店なんかもあるここに来るだろう、っていう俺予想。でも居なくなってから結構な日数食べてないっぽいリリィ（仮）は、やせ細って写真とかなり変わっていた。さぁどうすべきか、とまたまた首を傾けて。

「―…あ、そうだ。」

確か原田さんは、リリィは名前を呼ぶと誰でも返事をする…とか言ってたな。うんよし、それで行くしかない。

「…リリィ？」

頼む返事して、もう手掛かりないんだよー、と祈る俺の思いが通じたのか。

「―――…ナァン。」

少し怪しむようにじっとこちらを見ながら、それでもリリィは小さな声を返した。

「うっしゃ！」

良かったと笑ってから原田さんに預かったキャリーを取り出すと、リリィはその中にゆっくりと入っていった。平和的解決万歳。

「うへへ臨時ボーナス…って、黄昏？」

「――ミカ、」

ニヤニヤしながら呟いていると、五メートル程離れた地点に黄昏の気配を感じて振り返る。どうした、と首を傾げると、黄昏がなんだか滅多にしないもの凄く申し訳無さそうな顔をして立っていた。…あれぇ、なんか凄く嫌な予感。

「――それ、なあにぃ？」

「…拾った。」

いやそうじゃなくて、と言って顔を引きつらせる。黄昏が手を引くのは、

「――子供だな。」

少年でした。

……いや、意味分かんないからね？

「……依頼人だ。」

渋い顔の黄昏になんだか楽しくなってくる。こんなフツーっぽい少年が依頼人…ねぇ？

「…へぇ？そっか。」

それって、

「楽しそうな臭いすんねぇ。」

もしかしたら棚ぼたかもしれないと俺は静かに目を細めて笑った。

一章　人生は思い通り（後書き）

原田さんが名乗ってませんが、まぁそれは事前にアポを取ってたということで（おい）

二章　電気のない都市（前書き）

ここからチャラさを前面に出していきます。

語尾のびのびです。

…今更ですが三日月はチャラ男。

二章　電気のない都市

「…んで？」

ｉｎ・事務所。

とりあえずお話を聞きますかということで、リリィと少年と黄昏と俺、四人でここに戻ってきていた。黄昏によると、五番街の入り口付近で人攫い（キッドナッパー）に言葉巧みに拐わされそうになっていた少年を助けた、ってことらしいけども。

そんなことをつらつらと考えながら、俺はソファで縮こまる少年を目の前に首を傾げる。ここは宵闇町、その中でも知る人の少ない抜け道を通ってしか辿り着けない五番街。何も用のない人間が訪れるはずもない…ていうか真っ当な人なら一生来る機会なんて無いだろう場所だよ？

「そんな所に君みたいな少年が来るなんてぇ…」

よっぽどの事情ぉ？と下から覗き込んで尋ねると、顔を背けられた。ひどい。

どうしたらいいのさ、と困る俺と相変わらず顔を背けたままの少年を少し呆れたように眉を寄せながら見て、それからため息を吐いた黄昏が少年に声を掛ける。

こう見えて黄昏は子供受けがいい。男前だけど目線の鋭い黄昏は、愛想がいいとはいえないのにだ。何それギャップ萌え？じゃあ保育士さんにでも転職すればいいんじゃないの？…俺は笑っててもも逃げられるばっかなのに。―……うんごめんなさい八つ当たりです。て

いうかただのやっかみ？

一人でどよんと落ち込む俺に、うわまたやってるぜこいつ的な顔をした黄昏が近寄ってくる。…ごめんなさいねぇ子供と会話一つ出来ないダメ人間でー。

「…子供に好かれる奴みんな死ねっ。」

「…急にどうした。」

「あ、声に出てたぁ？ごめん気にしないでぇ。…そんで、少年は何だってぇ？」

え、敬語じゃなくなったら途端に喋り方がウザイって？いやいやこれが俺の標準装備だもん、しょうがないしょうがない。慣れて、いや慣れろ。

「ん、…母親を探してほしいそうだ。」

「…え？」

黄昏の最初のん、が可愛くて聞いてなかったに一票。――…違うよ？別にBでLな関係とかじゃないからね？二人ともマジ女の子大好きだからね？…黄昏は知らないけど…とにかくホントなんだからっ！

…と思いながら珍しく眉間にしわを寄せたら、黄昏が何か勘違いしたようで軽く溜め息を吐いた。

「それだけでここまで来るなんて、普通なら信じられねぇ話だが…、」

そう言って脇のソファで小さくなっている少年を見て、また溜め息。そんなに溜め息吐いたら幸せ逃げるよ？そして結局どんな案件？

「――政治家の知り合い「宗一郎おじさんは父さんのお兄さんです。」…そうか、悪い。まぁその宗一郎おじさんってのに母親捜索の助力を頼んだら、ココを紹介されたらしい。」

なるほど、母親捜索ですかー、と頷いた俺の思考が黄昏にもバレて

たのかなんか怪訝な顔された。やべぇやべぇ、これは話題を変えなきゃ。

「ふーん…そっかぁ…宗一郎おじさん、で政治家ってぇと、加賀美宗一郎氏かねぇ？」

「加賀美？って…あぁ、たまに来る狐みてぇなオッサンか。弟がいたなんて初耳だな。」

不思議そうに首を傾げる黄昏くんは、いい加減そんな動物みたいな感じに人のこと覚えない方がいいと思う。名前で覚えろ名前で。と苦笑しながら、確か妾腹の弟さんがいたねぇ、と教えてやる。

「「…妾腹、」」

同じセリフを呟いて、だけど表情の違う2人のコントラストが面白い。こんな町にいて特にこんな場所でそんな話聞き飽きるほど聞いてる黄昏の呆れたような顔と、まだ幼い…って言っても１０歳くらいか――少年の、妾腹？何それ？な顔。

いいねぇ、純粋で。

「―…あの、」

俺はニコニコ2人を見つめてるし、黄昏はむすっとしてるしで落ちた沈黙に乗じるように少年が口を開いた。…あれ、今さらだけどこの子の名前知らないや。

「ねぇねぇ少年、とりあえず君ぃ、名前はぁ？」

「…人に聞くときは、」

首を傾げ尋ねると、質問を無視されたのにムッとしたのかそれとも相当俺を警戒してんのか、なかなかに賢い切り返しをされた。…これは、先に自分が名乗れ、って意味だよねぇ。

「…あぁなるほどぉ。ええと、俺は猫谷三日月、気軽にミカさんって呼んでね？んでこっちは、」

ちらりと黄昏に視線をやると、一度瞬きをして返事を返される。

「さっき教えた。」

「…んー、そかぁ。んでぇ、今度こそ君の名前はぁ？」

振り向けば、少年はぎこちなくこくりと頷いた。いやいや、だからほんと警戒しすぎだよ。何なの？泣くよ？

「…斎藤修哉です。」

「ありゃぁ、そりゃあ…」

「ミカ。」

普通、と言いかけた俺に黄昏が言葉を被せる。余計なことは言うなと目で訴えてくるのはいいけど…顔怖いよ。初めて見た人にはきっと伝わんないって。

「はいはーい。…んで、しゅーやくん、質問があったんだよねぇ？なぁに？」

まぁ、俺の知り合いには普通じゃない名前の人しかいないからそう思うだけかと自己完結して首を傾げる。

…アレ、目ガ合ワナイヨ？俺の自意識過剰？

「…泣きたくなってきたぁ…。」

「あの、」

「あ、ごめん気にしないでぇ。…それでぇ？」

はい、と頷いて口を開いたしゅーやくんとは、やっぱり視線が合わない。…うん、別にいいんだけどね。

「僕、おじさんに道筋を教えられてとにかくここに行け、って言われただけで…。どんな所なのかも、なんて所なのかもよく分かってないんです。…—宵町五番街、って？」

「—…あはぁ、」

「そこからか…」

俺はもはや笑うしかない。そして黄昏はまたまた溜め息をついて額に手を当てていた。…ギャラは加賀美氏から貰えんだよねぇ？

「ちょっと長くなるけどぉ、いいかなぁ？」
「よろしくお願いします。」
「じゃあえーと、まず街の構造から、ね？」
めんどくさいなぁ、と思いながら、俺は口を開いた。

＊

宵町五番街。

――正確には、幻影（まぼろし）町宵区五番街。
三区分された幻影町の最奥部にあり、また最も危険なのが宵闇区である。まぁなぜ宵闇町と呼ぶかというと、ただ単に宵闇区だとゴロが悪いというだけの理由なのだが。

それはさておき。

幻影町は、それ全体が“お国”では危険地帯とされる場所で、他所よりぐっと治安は悪い。けれど、町の中でも治安の悪さには更にレベル分けがあるのだ。

まずは、幻影町の入り口に位置する暁（あかつき）区。学生の不良やチンピラ、並みレベルの８９３さんなど、比較的一般人に近い人間の彷徨く場所である。治安の悪さでいくとそこらの繁華街と大差ない。

次に、ちょっとヤバいぜ？な黄昏区。いかにも怪しげな人間ばかりが彷徨き、気を抜けば売り飛ばされるような町。暁区でこの町をな

めてかかった新参者が、ここで痛い目に遭うことが多い。あと黄昏まで来るとちょっと人外チックな奴らも出てくる。

そして最後がここ、宵闇区。もはや非人間・異能者しかおらず、そうでなくては生き残れない。普通の人間が入り込めば即、死、または奴隷の仲間入りだ。更に宵闇区の怖いのは、誰も助けてはくれないということ。たとえ力があっても、暗黙の了解“弱肉強食”。他人のことには首を突っ込まないのが宵闇区のマナーだ。

＊

「…んーとぉ、ここまではＯＫ？」

「―は、い。」

引きつった顔で頷くしゅーやくんは、やっと自分があまりにも危ない場所に来ていたと気づいたらしい。そんな…と絶句していた。気付くの遅いよねぇ。思わず小さなため息を吐くと、しゅーやくんはびくりと　肩を震わせる。――…いやごめん、俺、そういうのウｗゼｗエｗって思っちゃう人だからさ。

「うん、まぁ、しょーがないよぉ。てゆかさ、何も教えずにこんなとこにぶっ込んだ叔父さんにも責任あるじゃぁん、ソレ」

一応フォローした俺に続いて、チラリと窓の外を見た黄昏が言う。

「もう日が暮れた。すぐに暗くなんのに今更帰れねェだろ。―…とにかく事情、説明してみろ」

「…はい、えっと、それは…」

眉を寄せ下から見上げてくるしゅーやくんにニコ、と笑う。俺らは他の脳足りん共と違って弱者の味方だからね。…なんつって。

「うん、依頼は受けるよぉ。お母さんを助けたいなんて健気な少年を捨ておけないしぃ？」

なぁんて、嘘八百並べ立ててみる。ま、実際のとこはさ、あのおっさん、やっぱ政治家だけに金払いすげえ良いんだよね。俺は身内以

外に優しくはしない主義なんだ。表面上はさておき。でも一応そんなん言う訳には行かないし。……信じてくれたかな、くれたよね、お外の子だもん。幻影町の子はねぇ、うん、怖いよ、すっごく。なんか殺伐としてる。

「っ良かった！じゃあよろしくお願いします！」

そんな俺の内心などつゆ知らず、パア、と表情を明るくさせた少年は若干深刻な声で言葉を続けた。ところでさ、この位置からだとめっちゃつむじが見えるわ。あ、若白髪みっけ。おぉう、結構ある。…いやごめん、真剣に聞けって話だよね。

「――僕の母は、斎藤万（さいとうよろず）といいます。歳は…確か、３６。いなくなったのは二週間前です。スーパーのレジ打ちのバイトをしてて…夜はいつも８時には帰ってくるんですけど、その日は夜中になっても帰って来なくて。遅くなるとは聞いていたので気にしないで寝たんですけど…、学校に行って、帰って来て夜になっても母はいなくて。これはおかしいと思っておじさんに相談したんです」

「…うんとぉ、じゃあこの時点での疑問、差し当たって二つイイかなぁ？」

一度言葉をきった少年を眺めながら、俺はそう尋ねる。しゅーやくんははい、と言って小さくこくりと頷いた。

「まずはぁ、警察には連絡したぁ？叔父さんと仲が良かったとしてもぉ…ふつーは警察に連絡するもんでしょ？」

ん？と顔をのぞき込む。警察に知れてるかどうかは、今後の意向に大きく関係して来るもんでね。確認しときたいのよ。

「一応、叔父さんに電話した後相談しましたけど…あんまり、大事だと思って貰えてない気はします」

しょぼんと肩を落とすしゅーやくん。うーん、ま、そんなものか。ただの失踪としか思えない状況に警察が本腰入れるとは考えにくいよねぇ。だけど、この少年がそう考えたのはなんでなんだろ。

「しゅーやくんはぁ、どうしてそう思ったのぉ？」

「事情を説明しに行ったとき…頼れる親戚はいるかとか、学校は行ってるかとか、僕のことばっかり聞かれて。――…お母さんのことは何も聞かれなかったんです」
不満げな表情は、ふむ、こんな時にのんきに学校行ったりなんかできないって気持ちの表れだろうか。まぁ人生そんなもんだよ。子供がその後大丈夫そうなら、ほぼ影響はないもんねぇ。
「OK、じゃあ他には何か？」
「あ、えと…これ、お母さんの履歴書と、あと、写真です」
「おー、どれどれ」
差し出された紙二枚に手を伸ばすと、その手が届く前にピリリリ、という電子音がした。
「ッぅわ！」
「あ、ごめーんしゅーやくーん。――黄昏、いてらー」
「俺かよ…、」
はぁ、とゆるくため息を吐いて前髪をかきあげ、それでも踵を返していった黄昏の背中に軽く手を振ってから、今度こそ正面に向き直り紙を受け取る。少し戸惑った様子のしゅーやくんに、たぶん叔父さんだねぇと補足しながら紙に目を通した。
「…あのさぁしゅーやくん、」
「え、あ、はい！」
「つかぬ事をお聞きしますがー…お父さんは？」
黄昏がいないタイミングで思い出して良かった。息をつきつつ目は紙に落としたままでいると、彼は静かにポツリと呟いた。
「詳しいことは、よく…分からないんですけど、僕が小さい頃病気で、って言ってました」
「ん、なぁる…。じゃあ、お母さんでもお父さんでも、おじいちゃんおばあちゃんと連絡は？」
「お父さんの方はおじいちゃんがもう、あの、死んでて…おばあちゃんは入院してるんです。お母さんの方は、会ったこと、ないし」
また、俯く。にしてもしっかりした子だなあ。普通これぐらいの頃

はもっと落ち着きがないもんだと思う。もしこんな状況に陥ったらパニックになるよね、絶対。ところでさ、不自然なくらい親戚いなさすぎじゃね？真っ先に連絡取れるであろう祖父母が全員連絡不可状態とか、マジどんなご都合主義よ。

「…あの、それと…―」
おずおずと再び口を開いたしゅーやくんにハッとする。いけないいけない、ボーっとしてたや。ペシミズムに浸ってる場合じゃあないよ。パチンと軽く自分の頬を叩いて、なあに？と彼に向き直る。
「え、っと…母の、行方なんですけど、」
「あぁ、そのことなら大丈夫だよぉ」
何故かひくりと頬を引きつらせて言ったしゅーやくんの言葉を遮り指を鳴らす。
「近くに優秀なじょーほーやさんがいてねぇ…その人に依頼しようと思ってるから」
「…そう、ですか」
まぁその分コストはかかるけど…その辺は加賀見氏に頼めば何とかなるしょぉ。下手に今誤情報聞いちゃって見当違いの捜査するよりはいいしね。たぶん加賀見氏が調べた母親の“推定範囲”を言おうとしてたんだろうけれど。…しかし奴さん、のってくれっかねぇ。

そんな事を考えながらソファでごろごろと寝転がっていると、黄昏が帰って来る気配がして俺は顔を上げた。
「んー…、っかえりー」
「あぁ、…ミカ、ちょっといいか？」
「いやん黄昏くんたらせっ・きょ・く・て・kぐほぁ！？」
殴られました。しかも結構全力で。冗談の通じない奴だぜ、このまじめっ子め！――いや仕事だけだけどな。でもそんな所もスキ！！
（注：この作品はフィクションです）

とか心の中だけでダラダラと考えながら、僕、ハラハラしてる！と言いたげな顔をしてこっちを見るしゅーやくんと目を合わせて、追い払う様にしっしっと手を振ってから部屋の奥を指差した。
「…え、と、」
「あっち寝室だからさぁ、適当に服みっけて寝てていいよぉ。今日ふつーに波乱万丈で、疲れたっしょ？」
ね、とにっこり微笑むと、少年は不安そうにこちらを見てくる。
「二人は…、」
あらあら、そこ突っ込んじゃダメっしょぉ。つか普通突っ込まんしょー。空気読もうぜ。
一人で不安なのかしらねぇ。
「んー、俺らは今から仕事の打ち合わせしなきゃだからさぁ。あれだよ、夜こそが我らの時間的な」
うんうんと腕を組んで一人納得していると、しゅーやくんはちょっと怪訝そうな顔をしていたけど小さく頷いた。
「分かりました、…おやすみなさい」
「はーい、おやすみん」
「…おやすみ」
黄昏は返事をしてから部屋を出て行くしゅーやくんにそう手を上げて。俺はソファにだるんともたれ掛かったままニコニコと笑みを送った。

「――さぁてと、じゃあつまんない話しよっかぁ。」
「つまんねぇとか言うな」ゆるゆると吐息を零した黄昏がソファに座るのを眺めながら、俺はヘラヘラと笑った。だって。ちょーばっかみたいだけど、心情的にはちょっと不快だけどさ。楽しくなりそーな、予感。
「ふふふ、ごめんごめぇん、で、加賀美氏はなんだってぇ？」
自分の膝に頬杖をついたまま、俺はこの先を思い笑った。

――幻の夜はそれぞれに。今日も静かに残酷に、更けて行く。

やっつけ仕事

爽やかな朝。ピーチチチ、という小鳥たちの声を聞きながら、俺はコーヒーの入ったカップを傾けた。

「…はっはっは、いやぁ…――焼き鳥食いてぇ」

は、目覚め？最悪ですけど何か。…昨夜。仕事の話を終えた後、黄昏の部屋を少年に貸して、俺は自分の部屋、黄昏はもう一つの部屋で寝たワケ。部屋の並び、奥から黄昏、俺、少年。――うん、殺人音波が俺に直撃だね！死ぬかと思った！ホントあんな攻撃食らったのＨＡＪＩＭＥＴＥだよ。薄い壁のせいで俺に５００のダメージ☆だし。てかしゅーやくんはなんなの？人外なの？人害なの？死ぬの？しかもドアが緊急用に防音設備しっかりすぎ分厚すぎて入る前に仕掛けられた罠に気付けなかったし…！てかとりあえず、壁！安アパートか！それかラブホか！ここ結構家賃高い筈なんだけどなぁぁ！？…という訳で、寝不足どころか寝付けていない俺です爆発しろ。

「あ”ーあ”ーあ”ー」

頭痛ぇよど畜生、と頭を抱えていると、キィ、とリビングのドアが開く音がした。

「…っせぇな、なに騒いでんｄ」

「お前理由は聞かずに一発殴らせろ」

弟子を気遣った兄貴の心をぐしゃぐしゃポイするような発言をおしでないよ黄昏きゅん☆キャラ変わってる、とか言わないの、てか言わせなーい！

＊

「とりあえず君は今日から猿轡を嵌めて眠りについて貰うよキラッ」

キャラ崩壊なんて気にしない☆な男前な心境でウィンクした俺を迎え撃ったのは、うろたえ顔のしゅーやくんと呆れ半分罪悪感半分顔の黄昏でした。
「え、…え？」
「…そこまでしなくてもミカが耳栓でもしてりゃ良い話だろ」
「バカかちみは！バカかちみは！はい大事なことなので二回言いましたここテストに出るよ！！」
言いながらゆさゆさと黄昏の襟首引っ付かんで揺らす。しゅーやくんはあわあわしてっけどね、うん、知ったこっちゃねぇｗｗつうか。
「落ち着け」
「落ち着いてられっかこの粗忽者が！」
「粗忽者…」
眉間をひくひくっとさせる黄昏に、どうしよう吹き出しそうです。いやホント結構さっきまで真面目にイライラしてたんだけどさ、なんか面白くなって来ちゃった。
「あれは人類の仕業じゃないよかの弾道ミサイルテポ〇ンも秘密兵器ポセ〇ドンも真っ青の大量殺戮兵器だからね！？」
「―前者はともかく後者はフィクションじゃねぇか、じゃなくて…ハァ」
溜め息を吐いて困ったようにぐしゃぐしゃと頭を掻く黄昏。いやはや、まじめくんは真剣にしか捕らえらんなくて困るね、どうも。
「―…とまあ三日月・ザ・ショータイムはここまでにしてぇ」
「……」
「まじめな話、ちょっとこれだと俺と黄昏が一日おきに不眠症な状況になっちゃうんだけどぉ…どうするぅ？」
「そんなにひどいですか」
「うん」
「即答かよ」
「え、っと…、」
しゅーやくんはそう言って困ったように眉尻を下げた。いやまぁ別

に悩んで貰わんでも打開策は考えてあるんだけれども。
「…三日月さん、あの、お友達とか…」
「うん謂わんとすることは分かるけど聞き辛そうに言うのヤメテぇ。俺に友達いないみたいじゃなぁい」
あれでしょ、友達のとこに泊めて貰おう作戦でしょ。しゅーやくんを野宿させるわけにもいかないしね。一瞬で八つ裂きにされるよ。でも俺の友達ってか知り合いも、油断したら寝首かかれるような人等ばっかだしねぇ。てかそんな人間兵器送ったとか知れたら俺が寝首かかれちゃうよ。て訳で、
「でもそれはやっぱし君が危ないから却下ねぇ？……んーとりあえず、超高性能耳栓買ってー、俺と黄昏で端の部屋入ってー、後はアレだ、音波吸収剤があったはずだからそれを部屋に設置してっと…」
顎に手を当て、ぶつぶつと呟く。それを見る二人の目が若干冷たいのはもう気にしない。一通り諸々の対処法を列挙し終えた俺は、顔を上げてにっこりと笑った。
「てことで黄昏、ＧＯ！」
「俺かよ！」
ナイスツッコミです黄昏くん。

＊

面倒くさいことは全部押しつけやがって…！とギリギリ歯を噛みしめながら出て行った黄昏――あれだよね、黄昏って常に全力で生きてる感じがする、肉体的ってか精神的に――を見送ってから、俺は再び眠りにつきました。眠り姫のごとく。…いやだって、普通に眠いよ？お前同じ状況体験してみろよあぁん？ただ眠れないのとは訳が違ぇんだよ！とは言えいつだって爆睡する訳じゃないから、多少疲れは残るんだけどねー。でも大分楽だよ。ベッドから起き上がりぐるぐると腕を回しながらリビングに行くと、しゅーやくんが紅茶を飲みながらソファでテレビを見ていた。俺が入ってきたのには気

付いてないらしい。
「おっはよー、しゅーやくん」
近付いていってがしっとソファの後ろからのしかかると、しゅーやくんは何だか気まずげに、…おはようございます、と呟いて、それからハッとしたようにソファから慌てて立ち上がった。何々、どうしたよ。
「あの…っ勝手に紅茶…あとテレビも！」
「あいや、そんなことぉ？全然へーきだからぁ、そんな遠慮しなくていいよぉ。寧ろ俺にもいれてちょ」
「あ、はい！」
しゅーやくんがパタパタとキッチンに走っていくのを見ながら、ソファに座ってテレビを見ていると、その内紅茶が運ばれてきた。砂糖は、と遠慮がちに聞かれて2本指を立てると角砂糖を入れてくれる。…うわなにこの快適空間。黄昏も入れてくれるっちゃ入れてくれるけど、基本お客さんが来てるときだけだし、自分でいれろとか言うし。しゅーやくんマジ天使。

「あ、そうだしゅーやくん、」
「？はい」
紅茶を飲みながらまったりしているとやることをすっかり忘れそうだったので、先に口に出しておくことにする。
「昨日さー…知り合いの情報屋さんとこ行くっつったじゃぁん？」
「…あぁ…」
「んでそれ、今日行ってくっから。もうすぐ黄昏帰ってくると思うし、大人しく留守番しとってー。あ、俺と黄昏の部屋以外ならいじってだいじょぶだからぁ」
「分かりました、…でもあの、」
ルビー色をした紅茶の水面に一度視線を落として、それから訴えるように俺を見据えるしゅーやくんに瞳を細める。そんな顔してもダメよ。

「――それは無理、かなぁ」
ゴメンねぇ、とヘラヘラ笑いながら視線を下げると、感情を隠しきれない両手が洋服に皺を作っているのに気付く。よっぽどか。いやぁ愛されてんね、お母さん。
「…そう、ですか」
「うん。お母さんのこと、心配なのは分かるけど君が無闇に動いて解決することじゃないよぅ。危ない目に遭うのも本意じゃないしねぇ」
それもホントだし、嘘は言ってない。だけどそれだけじゃないのもやっぱり事実だ。情報屋というもんは、古今東西どうやら厄介な生き物のようで。そもそも今日は情報収集の依頼だけして帰る予定だしぃ、」
ねぇ？と頭をぽふぽふ撫でると、しゅーやくんは不服そうながらも小さくはい、と頷いた。
「うんうん、いー子ぉ。――んじゃ行ってくんね」
いってらっしゃいと手を振るしゅーやくんに背を向ける。そして俺は――…内心溜め息を吐きつつも、厄介な友人の許へ向かったのだった。

＊

「……あぁ、そうか、分かった。――…また連絡する」
僅かな逡巡染みた沈黙の後、ピッという音と共に会話の糸が切られる。男は疲労を吐き出すように溜め息をつくと、組んだ指の上に少し後退し始めた額を乗せて唸った。
男は皇国内でそれなりの権力を持っている。故に政府の重要案件に関わることも多く…――しかし、今回の件では詳しいことを殆ど聞かされていない。そんなことは今までに余りなかったことだっただけに、男は戸惑い、同時にいやな予感に苛まれていた。
「何だか、ひどく…――胸騒ぎがするのだ。…杞憂なら良いが」

また深く溜め息を吐いても、動き出してしまった事態は止められないし、上に進言出来るほどの権力はまだ男にはない。どうしようもないかと手元の書類に目を落としたところで、ドアをノックする音が聞こえ、入室の許可を返した。
「先生、会議のお時間です」
「あぁ、今行く」
部屋に入ってきた細身にメガネの秘書の言葉に頷き、先程まで見ていた書類をまとめる。立ち上がろうとして、あ、というつぶやきが聞こえ顔を上げた。
「？…どうした？」
「あ、いえ…―ただ、」
視線の先を辿れば、窓の向こうに暗いというより黒い夜空が広がっている。
「あぁ…満月、だな」
微かに目を眇め、それ以上何の感慨もなくただ秘書のことを意外とロマンチストなのだなと勝手に批評する。ややあって男はくるりときびすを返して部屋を出ていった。

パタンと音を立てて閉まったドアと男の後ろ姿を、青く丸い月が静かに見下ろしていた。

金魚の箱

「はあああぁぁぁあ、うん、こんなもんかな」
言って俺は立ち上がり大きく伸びをした。

あれから一週間が経った。事件の概要ってかまぁ、大まかなところは分かってきてる。例えば、少なくとも宵闇区に彼女――しゅーやくんのお母さんはいないことだとか、まぁ幻影町は割かし広いからまだ聞き込みは終わってないけど、恐らく他の区域にもいないであろう事とか、これは警察から盗んだ情報だけど、パート仲間の証言では失踪当日彼女はなんだかそわそわ？ってか緊張しているような雰囲気で仕事をちょいちょいミスってただとか、あと加賀美氏には他にも異母兄弟がわさわさいることだとか。――うん、お盛んだね加賀美父。あれ？心底どうでもいい？いやでもくだらないことの積み重ねが大事なときもあるってテレビで言ってたよ！（必死）
…まぁ実際のところ人探しの依頼なんて地味なもんで、殺人じゃあるまいし現場検証、なぁんて事もないぶん行方を探して三千里するしかない訳よ。チラッと部屋は見せて貰ったけどこれといって引っかかる物はないし、あとは周りの話が頼りなんだけど、警察みたいにあんまししつこく聞き込むわけにもいかないしね。
だからあちこち歩き回ってて見付けたらすぐ分かるように…あるいは何かヒントになる物はないかとあれから時々しゅーやくんにお母さんのことを色々聞いていた。クセだとか、好みだとか、交友関係だとかね。もちろん何度も聞いている話なんだけど、いろんな角度から話を聞くことで新しく見えてくることもある、…っていうのが俺の持論。

そんなわけでパソコンに向かっていた俺は作成した資料の角をトントン、とやって揃えてから欠伸を漏らす。

…あー、なんかすごい怠い。真面目に考え事してたらそれだけで一気にげんなりした。疲れた。――――こんなときは、気分転換が必要だよね？

「うんうん――ねぇ、しゅーやくん」

「？なんですか？」

こてんと不思議そうに首を傾けるしゅーやくんに、悪戯っぽくニッと笑ってみせる。

「――ちょっと外、出てこない？」

全力で怯えるしゅーやくんを説得するのは意外と骨が折れました。

＊

「ううぅ…」

「もー、テンションひっくいなぁ。大体ぃ、ここまで一人で来たのに今更でなぁい？」

肩を落とすしゅーやくんをずるずると引きずりながら言う。学校になんか行ってられない！とか言って事務所に居候ってる割に、しゅーやくんは外に全く慣れていない。…と、いうか、事務所限定で平気なのかな？しゅーやくんは……初日の事件のこともあってちょっと申し訳無さそうだったけど、こっちとしては一応加賀美氏に頼まれてるしね。面倒は見れないから住まわせてやってくれ、って。って訳で、ちょっとお外に慣れようぜしゅーやくん、ってのも兼ねてるわけですよ。でもさすがに宵闇区は危険すぎるから黄昏区なんだけどね。まぁどっちにしろ俺にはショッピングひゃっほう！

…あ、ここのお店こっちにも支店出したんだ。勇気あるぅ。そんなことを考えながら久々訪れる――ってもまぁ一ヶ月ぶりくらいだけど――黄昏区の外観に、忙しなくキョロキョロしていると、後ろか

ら悲痛な声がして振り返った。
「来るときは、とにかく切羽詰まってたんですよ！そんな、観光気分じゃ居られないです！！」
…なんだか、ねぇ。ホント、年相応じゃないっつか。危険だとわかってもワクワクしちゃうのがこの年頃じゃないの？まぁ面白いからいいけどさぁ。
「まぁまぁそう言わずにさ、ね？――あ、あのお店気になる」
「ミカさぁぁぁん！」
相も変わらずずるずると引きずられるのって、割とキツくないのかな。肉体的にも、精神的にも。相変わらず諦めの悪いしゅーやくんを引きずりながら、俺は後方から飛んでくる微かな害意に口元を緩めた。

＊

「いやいや…楽しいねぇ」
「僕は全く楽しくないです」
満身創痍。そんな言葉がぴったり当てはまるしゅーやくんを適当になだめすかして、俺は人気のない路地裏をにこにこと歩いていた。いやだって、こっちのが確実に近いんだけど、しゅーやくんが人気の無いとこビビるんだもん、めんどくさいよね。俺だってそれなり強いんだけど、信用無い？
「にしても…少し買いすぎたかなぁ」
「――明らかに」
マジで？と首を傾げる俺の両手には、アクセやら服やらあと食料品とか色々。何を買うにしても一気買いしちゃうタイプなんだよね、俺って。その方が安いし。てか、今思ったんだけど、もしかして、しゅーやくんてツッコミの言葉のチョイスがおじさん臭いから老けt…大人びて見えんのかな？
むむ、と眉間にしわを寄せる。生暖かい眼差しでこっちを見るしゅ

ーやくんはとりあえず無視していると――――ふと何か違和感を感じて、俺は顔を上げ目を細めた。どこまでも続くような細い道のどこかで、ざあ、と風が鳴る。
ふと横を見ると、目を瞬かせたしゅーやくんと目があって。目を逸らさない俺に困惑したような顔をするしゅーやくんに、そっと口を開いた。
「……、」
「――…しゅーやくん、」
もう一度、風が啼いた。
「――伏せて」
しゅーやくんが不思議そうに目を見開きぼうっとしているのに舌打ちして、仕方なくその頭を掴んで無理矢理に下げさせる。瞬間、ヒュッと頭上を何か質量を持った物が通り過ぎていった気がしたのは、きっと気のせいではない。どころか、多分しゅーやくんだって気付いてるでしょ。
「な、え…！？」
おろおろとしゅーやくんは口をぱくぱくさせる。もー君、そればっかりねー、と苦笑しようとするより、先に。視界から突然少年が消えた。
「あっるぇぇー…」
おっかしいな、と頭を掻いて、ゆっくりと立ち上がる。――――もちろん、首に冷たい感触は感じていたから、両手を静かにあげて。
「――動くな」
「別に元から動いてないし、つーか動く気もないしぃ？…まぁそんなカリカリしないでよぉおにーさん」
「っ動くなと言っているだろう！」
せっせとちまちま逆方向に体を回転させながら喋ると、さらにぐい、と強く冷たいソレ…銃口を突き付けられる。あぁあー怒るだろうな

と思ったから、折角頑張って足だけで体の向き変えてたのに。これでも怒られちゃうの？心狭いねさすがモブぞ。
「んっ…んー」
「ミカ…さ、ん」
助けて、という声にならない心の悲鳴的な物が聞こえてきょとんとする。やっぱり皆さんご予想通り、もう一人の―…んー、スーツ？ま、ここはオーソドックスに黒ふk「ミカさん！」…くに拘束されていた。うわぁ本格的に何かの主人公みたいだね。
「なーぁにぃー」
焦ったように叫ぶしゅーやくんに、安心させるためにっこりと微笑む。見るとあなざー☆黒服さんの銃口はさっきより強くしゅーやくんの頭に押し付けられていた。にしてもスゴいね、ここまでしちゃうんだ、無駄なのに。…あ、いや、無駄とか分かってないから、なのかな？
「…僕っ…！」
「いやいやというかしゅーやきゅん俺もそこはかとなくピンチなのだが。寧ろ俺がヒーロー呼びたい勢いさ助けてたそえもーん！」
「混ざってる上に分かりづらい！しかも元ネタこういう殺伐としたシーンで役に立ちますかね！？」
キレのいいツッコミをどうもありがとう。君ならきっと黄昏の後継者になれるよ！いや実際は色んな意味で無理だけどさ。
「おい、少し口を慎めよ？」
言って黒服の男はすうっと目を細め、拘束する手を強めた。ちょ、おいＫＹ。会話ぶったぎるなよ。いやある意味空気読めてるけど。モブとしては。しかも俺を押さえてる人よりかっとならない人みたいで、多少は雰囲気がある。少なくとも小者臭さはないよ良かったね。
「…っ」
「あははぁー…てかさぁ、」
どうにかして！的な目を向けられたので、しょーがなく黒服？に話

し掛ける。なんだ、と先を促され、俺は内心、困ったなぁと思いつつ疑問を口にした。
「君ら、何がしたいの？」
首を傾げる。その動きにまで銃口が付いてくるので、俺は普通に笑いそうになってしまった。いやいやいや、律儀すぎるってバカでしょ！これ傍目にはきっとかなり面白い光景だったよ！？…とプルプルしながら笑いを抑えていると、口端をぴくりとも動かさず見下すような目をした黒服？が口を開いた。――え、凄い。
「お前に言われるまでもない。…斎藤修哉、それから解決屋酒月構成員の猫谷三日月、」
この件から手を引け、と言われ、俺は苦笑するしかない。
「そう言われてもねぇ…。もう前払い金は貰っちゃったし、依頼人さんも、ほら」
目を向けたしゅーやくんは青い顔で、でも唇をきっと結んでいて。どう見ても諦める気はなさそうだよ。
「――…負けません」
「だってさー。依頼人さんが続行しろってんなら俺らがやめるわけにはいかないねぇ」
「っ貴様！」
にこにこしていると激昂したのは黒服？さん。今の状況を分かってるのかと言わんばかりに銃口を押し付けてくるので頭が貫通しそうだようわぁい。それを制するように軽く睨んで、今度は黒服？さんが口を開く。うんうん、理性って大事。
「――…さもなくば、と言ってもか」
わぁ脅しとか初めて受けたよ。すげぇ興奮する。
「まず殺される気がしないんだけどぉ…、まぁお金貰ってるし、途中でやめんのはさぁ、ほら、俺のプライドに関わるじゃん？」
「――後で後悔するぞ」
「あは、そん時はそん時だよ。――なんだって受けて立つ」
じっと見つめ合う。いやそんなかわいいもんじゃないね、睨み合う。

…よく“一瞬がとても長く感じられた…”とか言うけどさ、あれって頭ん中では全く別のこと考えてるからじゃないかな。実際俺がそうですし。こんなおっさんと見つめ合ったって楽しくねぇんだよバカヤロー！女の子連れてこい出来れば宵闇区に住んでない人で！サプライズの触手さんとかスライムとかなにも楽しくないからさ！とか何とか思いながらぼんやりしていると、黒服？さんが、くっと笑った。…いやあれ笑顔か？すごい歪んでるけども。

「…その選択、命取りにならなければいいな」

「ははは、そうならないことを願ってるよぉ。……てことで、お引き取りくださいな」

シッシッと手を揺らすと、唐突に半ば突き飛ばすようにして解放された。おおぅ、危ないなぁ。よろめきながらしゅーやくんの方を見ると、普通に解放されていた。けど、黒服？さんの視線ぱねぇ。マジ怖ぇ。なんか凄い憎々しげな目でしゅーやくんを見てるけど！子供嫌いなの！？

「にしてもきっつい目だなぁ…。いやねぇ、最近の若い子ｈ「ミカさん？」おっとしゅーやくんいつの間にそんな所に！？」

びっくりしたぁ、と目をぱちくりさせると、俺の目の前に来ていたしゅーやくんは呆れたような怒ってるような眼差しを向けてきた。

…て、いやいやなんで怒ってんのよ。

「あの二人は？」

「とっくに帰りましたよ―……はぁ」

おやなんだか怖いぞ？

「えーと、とりあえずしゅーやくん、落ち着いて」

そう言うときょとんとしたので、なんか怒ってるみたいだから、と付け加える。するとしゅーやくんは一瞬顔を引きつらせた後ぼそりと呟いた。

「こわ、かったんです」

「……あ、」

「あんな、あんなことになるなんて思ってなかった…。母さんを探

すのをやめろって、一体どういう意味なんですか！？」
あぁそうか。俺は１０年近くこの町で暮らしてすっかり慣れかかっていたけど…。“一般人”にとって、あんなのそうそう起こるもんじゃない。ましてや子供には、よほどのこと、か。救いを求めるようなしゅーやくんの視線を捉え、俺は真顔で言った。
「落ち着いてしゅーやくん。今俺にいえることはただ一つ、――――そろそろ腕が限界です」
「……ミカさん、」
またしても呆れたような目を食らった俺に多大なるダメージ☆ズギャン！
「いやだって、ちょ、ホントに超大荷物なんだもん！早く帰ろうぜ！」
うんもう無理なんだ！腕がもげそう！…強さとやせ我慢は別物だよね。とうんうん頷くけど、まだしゅーやくんがもやもやした顔なので渋々再び口を開く。俺ってばシリアス向いてないんだけどなぁ。
「……ていうか、さ。考えてもしょうがないよ。しゅーやくんは何があってもお母さんを探すって、覚悟したんでしょ？じゃあその目的にただ向かってくしか、ないじゃない」
「…はい」
「帰ろっか」
「――あの、ミカさん」
「んー？」
適当に返事をして振り返ると、しゅーやくんはぎこちなく笑みを浮かべていた。
「…ありがとう、ございます」
「――いいえー、俺は何もしてないよぉ」
そう答えて歩き出す。初めてしゅーやくんの笑顔を見たなとふと考えて苦笑した。何なの俺悲しい。

――そう例え向こうがどんなにけしかけて来ようが、

「何も、ね…」

薄く呟いた皮肉めいた言葉は、空気に溶けて消えた。

金魚の箱（後書き）

しゅーやくんの一人称にバラつきがあるかも…！です。

気にしないでください（キラッ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4185y/

ようこそ、宵闇町五番街へ。

2011年12月29日15時52分発行